花いっぱいのための道ばた園芸の内容とその普及について

林　　角　郎

１．花づくりのボランティア活動を順次終えて

内容に入る前に筆者の最近の状況について述べます。まずこれまでにも述べています、館山市中央公民館の花壇の栽培は、2006年から数名のボランティアの人達の熱心な協力を得て行ってきましたが、今年2017年３月で筆者を含め全員が終了し、次のグループの人達と交代しました。また別に筆者は2008年から市が管理しているＪＲ館山駅東口のロータリー花壇の年２回の栽培計画の作成を行ない、これはまだ続けています。そして2010年から地元地方紙の房日新聞に「新しい花づくり」という題で月に１回の記事の原稿を書いてきましたが、これは明2018年５月で100号になるためその時点で終了する予定です。そんな中で筆者自身は今年８月で満90才となり、足は不自由で体も弱くなったものの、日常は元気に過しております。

これらはすべて無報酬で行ってきましたが、筆者としてはそれぞれに得るところが多々ありました。特に公民館の花壇栽培では参加者全員が週に１回作業して常に花が見られる状態で管理したため、多くの方々から大変感謝されました。また筆者自身は花壇栽培の労力の節減と装飾面で立体化するために宿根草や花木の導入を発案して栽培体系を作ることができました。その結果、館山市ではこの方式を応用して今後別な花壇でこの方式（ＰＡ植栽方式）による花壇栽培の実施を検討しています。

そして房日新聞の記事では当初は家庭内の花づくりにおける新しい栽培のアイディアなどの内容で考えていましたが、その取材のため市内や他の地域を見て廻るうちに道路から見える場所に作られている花に注目し、その様子を調べて記事としました。それを重ねるうちに道の近くに作られる花が、多くの人々に喜ばれ、ひいては地域の特長を示すためにも重要なものと気が付き、さらに各地の状況を調べてきました。

その様子をまとめて本誌の32号（2013年）、33号（2014年）と35号（2016年）の３期にわたり実例と解説を主として述べました。その中で道の近くで行う花など、すべての栽培を含めて「道ばた園芸」と称することを提案しました。

なおこの道ばた園芸の言葉については、これもこれまで述べていますが田中宏さんは路地園芸と表現されています。しかし路地という言葉は表通りよりさらに入った狭い道という印象が強いため、筆者は道ばたという名にしました。また、この路地園芸という言葉についても、これまでの筆者の文中では路地裏園芸と述べてきました。これは初期の頃に田中さんが述べる際、路地裏と表現されたように思っていましたが、このことに関する文中では路地園芸となっていますので改めて路地園芸とさせていただきます。

２．道ばた園芸の栽培目的による区分

この道ばた花壇について、今回は栽培の目的や栽培品目による区分について、筆者自身の考えで検討してみました。

まず予備的な考えとして道ばたで栽培する目的を考えますと、３種の場合があげられます。

その第１は単純に庭が狭く屋敷内で栽培できない場合に、道に面した場所を活用して栽培する場合で常緑樹や竹類などを栽培する例をよく見ます。

次の第２は栽培した成果を家族と共に近隣の人々にも示そうという場合で、外の道に面して咲いた鉢物や容器を置いて、道を通る人に見せたりしています。筆者が東京の神田にある伊東学園に勤務していた際、路地の道を通りよく見かけました。この場合開花までの養成栽培は建物の屋上か物干台などで行い、開花後に道の近くに出すなどしています。

第３は家屋敷内の栽培と切り離しで、ことさら道を通る人々に示すために栽培する場合で、これがこのあとの主題とするものです。この場合はさらに分けますと、その栽培の目的が住まっている地域内の人を対象とする場合と、さらに広く他地区の人を対象とする観光的な場所との２種に分けられます。この場合多くは両者合わせて考えることが多いでしょうが、もし観光用として行う場合は見応えあることが必要です。このため地域として特徴をもたせ、量的にもある程度まとまる必要があります。この点で以下の考察はこの第３の、特に観光用の場合もふまえて述べることとします。

表．道ばた花壇の栽培形態別一覧表

区 分	使用植物	年作付回数、 栽 培 期 間	栽培形態 特長	利　点	欠　点
A	一年草主体	年に２～３回植替え	ほぼ周年開花するよう計画できる はなやかな状態の花壇造成ができる	周年花が絶えない 常時花が見られる 花は豪華	費用、手間が多くかかる 気温土壌湿度などの影響受けやすい 景観が平面的
B	一年草＋多年草、花木	一年草は同上 多年草は毎年手入れ ４～５年に１回株分け 花木は毎年剪定	中央部、後方に宿根草、花木を入れ、手前側に一年草を配置し、立体的な構成とする 株間に一年草を植えれば冬も開花続く	景観が立体的 一年草を入れて周年開花 乾湿の影響はより少ない	多少費用労力はかかるが、２年目以降は種苗代は減り、労力も少なくてすむ
C	多年草、 花木主体	５年に１回程度株分け 花木も毎年剪定、手入れ	一年草は使わず多年草や花木のみ なるべく手間をかけず自然のまま発育させるが若干の剪定、手入れ実施	一度植えればあとは種苗代不要 栽培労力も軽減 立体感が高まり、美感が高まる	開花期間が限定され、他は葉のみ 常緑以外冬はなし 毎年剪定、整枝を必要とする種類がある
D	丈夫な多年草、必要により花木	10年に１回程度株分け	なるべく植えたまま、自然に発育するままにする 宿根草はなるべく長く咲く種類を作る	労力は最も少ない 費用も比較的少ない 植えたままで毎年花は見られる	手間をかけないため種類は限られる 開花期が限定され、それ以外の時は葉のみ 冬はなし

３．道ばた園芸の栽培品目を主とした区分

念のため栽培を規定しますと、この栽培は個人か店、事業所等民間の個々の場合とします。また花を作る場所は道の近くで地床なり容器を使用して、自然の状態で育て、咲く花や生育する葉が見られる所とします。この場合栽培する場所が一般の道路まではみ出る恐れもありますが、必ず法規に従うものとします。

こうした中で問題は何を作るかということになります。このため大別して一年草、多年草と花木、緑化樹などの植栽品の別に栽培への労力や費用のかけ方で筆者なりにＡ～Ｄの４段階で分け、その特長を示したものが表のとおりです。その若干の解説を下に述べます。

Ａ．一年草のみの栽培

まず多くの人々が花壇栽培を行なう場合は一年草の花壇用品種を種子から育てるか、苗を購入して植えることになります。この苗を年間に２～３回切替えて順次栽培することで周年花を切らさず花壇を飾ることができます。

しかし通常の花壇用品種は概して草丈の低い場合が多いため全体として高さのないフラットなスタイルとなりがちです。また道路わきは概して日照や風当りなどの不良な条件の場合が多いため一年草のみでは耐えられず、栽培が続けられない場合もあります。

Ａタイプ　殺風景な石の門の前がプリムラのプランターで春の景色に
2017.3.22

Ａタイプ　道路に面した石塀の上で開花するジニアプロフュージョンと大輪ポーチュラカ
2017.10.9

このためにＢのタイプとしてより抵抗性があって、草丈も高くなりやすい宿根草や花木類を一年草と混植する場合を考えました。この場合永年性植物は一度植えれば数年間据え置くことができ、根も深く張るため環境による影響は若干軽減されます。同時に切替えの労力や種苗代等の経費も軽減されます。家庭ではこのタイプが今後多くなるものと思われます。

Ｂタイプ　商店の建物に付設した小花壇で色々な花が咲き、スイートピーで立体感を
2017.5.9

Ｂタイプ　看護学校の建物前花壇で後のツツジの前に折々の一年草を栽培　2016.12.15

次のＣタイプはそれほど強く花の栽培は望まなくても環境美化のためになるべく手間はかけずに花を作っておきたいと望む人などが行なう例として考えられます。あるいは花に若干の興味はありながらなるべく手間をかけず放任に近い状態で作り、時期には花の咲くものを植えておくだけの場合もこれに当ります。この場合には宿根草や花木のみを植えてそのまま何年か栽培し、必要な管理は何とか行なう場合とします。

Ｃタイプ　大型スーパー、駐車場前の花壇に植えたガザニアの白花種がほとんど周年開花し続ける　2016.11.18

最後のＤタイプはさらに栽培意欲の少ない場合で、通常なら何の花も緑もない状態で過すような場合に試みとしてでもすすめるもので、丈夫で放任に近い状態でおいてもたくましく生長するような種類の植栽が対象となります。植える種類としては花木や緑化樹で生長の遅い種類や長い年月放置しても毎年咲く宿根草が適します。

Ｄタイプ　Ｃタイプとは別な大型スーパーの花壇全面をブルーシートで覆い、周辺に低いコニファーを植付けて除草と装飾を
2017.10.9

Ｄタイプ　ブロック塀の下のわずかな土で育ち、
花を咲かせているマツバギク
2017.5.19

以上の栽培の中で一年草を利用する場合、栽培中実った種子がこぼれて翌年発芽して生長、開花する種類を利用する場合があり、こぼれ種子栽培と言ってよいと思います。これも丁寧に行うなら自然に発芽をした苗を一度育苗して揃った苗を植える場合もあります。ただしこの方法では形質のくずれが予想され、一代交配種は困難です。そして登録品種は避けるべきです。

もう一つ敷き石のすき間、舗装の割れ目等から自然に出た芽を育てる場合があります。もしこれが多年生植物ならそのまま育ち毎年咲いている例もあります。よく「ド根性な花」として新聞に出たりもしますが、それらも地域内で咲く花をより多くするためには有効と考えられます。

この考えに似た形としてブロック塀などの基部に少しの土を置き、そこで栽培している例も目にします。上記写真はその例の一つですが、このような栽培でも少しまとまれば目だつものになる可能性があります。

４．地域として花いっぱいに全員参加を

一般に花いっぱいの活動をする場合には一律に同一種の苗を配りがちですが、人により事情が異なり、栽培の環境も違うため、地域全体として行動しようとするならむしろ各戸各人の状況に合わせて材料や作り方を考える必要があると思います。今回の表の区分は、そのような戸別の事情を考慮した一つ区分案なので、さらに別な考えも種々ありうるでしょう。

ただ基本的には地域内でなるべく多くの人々が参加して、道の近くの場所にとぎれることなく花が見られるよう、材料の選択と作り方を工夫して花作りを進めるべきでしょう。こうした動きは歩みが遅いでしょうが、いろいろとヒントを知らせることで、それぞれの考えで点から線、線から面へとだんだんとひろがりを見せることになることを確信します。

またその気持のある人々が話し合ってグループを作って情報交流したりし、さらにそのようなグループ同士の連絡が取れればさらにより良く発展するでしょう。